

母校だより

學校日誌

五月六日 和田先生の渡歐

和田教授。佛蘭西語研究のため、滿一ヶ年半佛蘭西へ留學を命ぜられ本日當地出發、十日神戸解纜の宮崎丸にて渡歐の途に就かる。吾等は此の榮ある鹿嶋立ちにあたり切に先生の御自愛御加餐を祈つてやまない次第である。

五月八日 養蠶科三學年修學旅行

養蠶科三學年生は佐藤(春)教授、山口助手引率の下に東京、横濱方面へ三泊四日の豫定を以て本日出發す。

五月九日 米國絹業協會派遣生絲格付協議員一行來校

生絲格付問題研究に來朝された該委員ウイリアム・シイ・チニー氏等と案内役の日本人合せて十數名本日本來校。製絲紡績部では追に其道の苦勞人だけに、微細の點に互り綿密を極めた視察ぶりであつた。養蠶部では何も見せるものがない。大弱り、古い標本等を陳列して見せたが一向に引きたらず、結局廊下の真中へ黒幕を張り廻して暗室を急造し、プロジェクトン アバラタスを持ち出し「絹絲線の斷面」のプレバライトを映寫して、東西！東西！で漸く糊塗する。ヤレヤレ！である。

五月十二日 蠶靈供養祭執行

午後一時、鬱蒼たる櫻樹に擁せられた、蠶靈供養塔前に祭壇をしつらへ紅白の幔幕を引き廻はした。式場に於て先づ施主校長先生によつて開式の幕が切つて下ろされた。僧形の導師半田孝海師は三名の伴僧を従へ、法燈を高くかゝげて

いとも崇嚴に執り行はせらる。万籟寂として、葉擦れの音さへも静まると云ふ靜肅から、立登る一縷の香煙と哀音切々たる經文とを見聞しては、如何に怨みをのんで人間の犠牲となつた天虫でも、靈あらば急ぎ來り饗けねばなるまい。昨年迄此際參列者に供物として菓子を出したそうだが本年は經費多端の折柄とかにて廢止さる。兎に角淋しそうに見えた、さみしそうに！

新入生歡迎會

蠶靈供養祭後引き続き武道場に於て新入生の歡迎會を行ふ、上級生は夫々熱辯をふるつて大いに威力を示す。

五月十三日 春蠶掃立

本年は早春以來非常に不順の天候である。然し幸ひに降霜がなかつたから何よりであつた。一般に掃立が後れそうに見えたものが急に暖氣がまして來て、まづ平年通りの掃立が出來た。

本校本日より掃立を開始す。

五月十八日 防火演習

本校西北端養蠶部調桑室裏からの出火と假想して、學生職員一同各部署に就き放水して防火演習を行ふ。消火栓から噴出する水勢は虫の走るが如くにホースを潜ぐり、學生の持つ管口から迸出して櫻の葉がくれに見ゆる調桑室の屋根の上に散る、實に壯觀のものではあるが罪の無い調桑室の不審顔に同情せざるを得ない。

六月一日 製絲科三年生校外實習

五月二十八日、校外實習に關する訓辭を校長先生よりうけ本日出發、期間は約二ヶ月、主として關東、關西方面の製絲場である。

六月十六日 學生死亡

養蠶科二學年生井上忠氏盲腸炎で上田病院に入院中更に腹膜炎を併發し本日死亡す、哀悼の情に不堪、郷里は佐賀縣東松浦郡入野村大字入野六二番地

六月二十二日 製絲科一學年生殺蛹乾燥實習見學

往年、一年生に二週間の校外實習を課したものであつた。中學を出てから二ヶ月目にあの苦勞な校外實習であつたら、爲めにはならうが随分無茶のものであつた。今日は夫れに換へた見學である。荻原教師引率の下に丸子町依田社へ旅行即日歸校。

六月二十四日 養蠶科一學年生養蠶實習終了

養蠶科一學年生の養蠶實習近來にない上結果で終了。豊美な繭が六十何貫も採れて、糸量が十四匁も出て、繭價が圖抜けてよくて(但し學校の會計へ引き渡すのであるから評價は養蠶部です)；兎に角養蠶部は鼻高々であるから學校の製絲部は勿論會計、校長先生に至る迄連れて來てしきりに感心せしめる、如何です！の大安賣りである(此項養蠶部の記載であるから、いさゝか手前味噌の點もあるやうである、製絲部の某曰く、おらそんなことあ知らね！)

六月二十五日 學生死亡

紡績科一學年生南部寛輔氏死亡、哀悼の情に堪へず。郷里は山口縣大津郡仙崎町第一、九四五番地。

製絲科二學年生校外實習

製絲科二學年生、本日より約四週間東北關東方面へ校外實習に出發。

六月二十六日 紡績科三學年生校外實習

紡績科三學年生、本日より約二十日間、各地紡績工場へ校外實習に出發

六月二十七日 養蠶科一學年生修學旅行

養蠶科一學年生、倉澤教師山口依田兩助手引率の下に四日の豫定を以つて松本諏訪地方へ天祚蠶視察のため出發、諏訪に於て解散し學生は其儘引き續き暑中休暇。

七月二日 紡績科學生夏季實習

紡績科一、二學年生、夏季校内實習を本日より一週間施行。

七月五日 夏 蠶 掃 立

養蠶科三學年生、夏蠶の掃立をなす。二學年生は校外實習に、一學年生は暑中休暇に何れも出でて不在、三學年生は主として三號蠶室に整居し他の蠶室は閑々として甚だ静寂を極めたものである。之が學校に於ける最終の實習と思ふてか其の熱心さは三嘆に値ひする。

七月十日 養蠶科二學年生校外實習

養蠶科二學年生、各地の試験場、蠶種製造家等へ校外實習のため出發、期間三十五日を満了すれば引き續き暑中休暇
七月十二日十三日十四日 上田市營グラウンドのグラウンド開き

上田市としてはいさゝか不似合ひと云はるゝ程に廣大な野球グラウンドが、松尾城の西端に在る堀の中の恰好な地を巧に利用して完成された、其のグラウンド開きである。立教と慶應留守軍とが東京からやつて來て、所謂大學チームのキビくした所を見せる。今秋大學リーグ戦に好投して早大を大いに悩ました水原も來て、腕の牙えを見せる。

上田の野球熱はドライイものである。

七月二十八日 上田市長再選

現市長勝俣英吉郎氏任期満了改選の結果再選す

七月十七日 豪 雨 週 餘

本日より殆ど一週間連日の豪雨、千曲川一帯の橋梁を脅威し交通を杜絶せしめた箇所が甚だ多い。上田でもなつめ河岸、櫻木町、水道町邊一帯は浸水して近來稀有の出水である。

此の頃暗雲低迷天地晦冥には實いつて閉口である、蜻蛉の卵のやうな微がニョキ／＼とどこへでも飛んで出て、宛然梅雨再來の感がある。

七月二十五日 千曲川の川開き

旬日に亘つた雨も今日は珍らしく上り、好晴に迎へられた煙火日和、上田橋の橋上橋下人を以て埋まる二尺玉がいくつも頭上はるかに傘の如く開く、煙花の音は兎に角景氣の良いものである。

八月二日 養蠶科三學年生實習終了

養蠶科三學年生の夏蠶實習終了、故山に歸養して讀書に親しむものもあれば更に秋蠶の實習を地方へ出てやるものもある。卒業の年だけに却々馬力がかゝつて居る。

八月四日 一學年生實習開始

暑中休暇を小早くすませた養蠶科製糸科各一學年生は本日より秋蠶飼育の實習開始、製糸科一學年生にとつては之が蠶の初見參で随分面喰つた學生もあるやうである。

八月七日 學生死亡

養蠶科第一學年生繼代瀧澤義雄氏、早朝七夕流しのために千曲川へ行き水泳中心臓麻痺を起し遂に不歸の客となる哀悼の極である。生家は本郡鹽川村出身 行く水の行方をしらぬさだめ哉

八月九日 天氣恢復の兆

一兩日前から密雲が紙を割くやうに段々と薄くなつて來、天氣恢復の兆見ゆ、陰鬱な地獄界から清明な天空に放たれた様な感じで辛く愁眉を開く。

然し冷涼なることは實に驚くにたへたるものであつた、十二日花市の晩、羽織を着たものを散見すると云ふ滑稽さである。

九月一日 關東震災記念日

關東震災を記念するために默禱式を行ふ、生憎在校生は養蠶製糸各一學年生だけであるから一同蠶室に集合し佐藤

(春)先生の當時の感想談があつて一分間黙禱する。彼の震災の慘たる光景が頭の中へ煙火の様に現はれて一分間でパツ！と消える。

三吉先生一年忌

恩師三吉先生逝ひて滿一年！歲月は實に水の流るゝが如きものである。小縣蠶業學校同窓會の主催で鍛冶町本陽寺に一年忌行はせらる。吾が教職員一同を代表して蒲生教授焼香す。

九月四日 養蠶實習終了

本日を以て本年度の養蠶實習全部終了、養蠶に關係ある教職員は之から十一日迄が漸く暑中休暇、何をすることも餘りに短かすぎるが然し實に尊い一週日である。

九月十日 庭球部東京高蠶へ遠征

今迄五回交戦して五敗と云ふじめなレコードである、ところが本年は遂に勝つた。タドン山も六日目に來て辛く一點を利し苦笑をしつゝ土俵を下がると云ふ所であるフレ！フレ！西ヶ原。

九月十二日 新學期開始

始業式、校長先生から新學期に對する覺悟に就いて種々と御訓辭があつた。

學生は月餘の暑中休暇を思ひくゞに使ひ盡し、充分の餘裕と燃ゆる様な求學心を胸にたゞえて元氣よく登校、生色校内に充ち、今日ばかりは學校の煙突から吐き出す煙もすばらしい上景氣の様である。

九月十三日 王大楨氏來校

日支親善の特使として中華民國から派遣せられた王大楨氏一行來校參觀せらる、午後上田市公會堂に於て同氏の講演あり學生一同聽講す、堂に入った日本語で諧謔を加へつゝ平等條約の提起を論じさる流暢ぶりに一同大いに敬服する

九月二十八日 秩父宮殿下御成婚奉祝

秩父宮殿下の御成婚を奉祝するため午後十二時四十分、運動場に東京方面へ面して整列し、校長の萬歳に稱和し謹みて奉祝の禮を行ふ。

九月三十日 製絲部員一同遠足

總勢三十五名、但し大瀧科長、三谷先生、内田教授等不參のため大部分は教婦の卵ばかり、茲年から上山田温泉へ新装を替ひ、大いに勉強すると云はれて居る清風園へ出かける、對手が女であるから遊びは悉く御上品である。男子の餘興としてピンポンを演れば女だてらに女人禁制の埒を越えて應戦するものもあるが猛烈な巨弾を喰つて尻尾を巻く娘子軍は何時、何處で覺えたか、養成工女向きの遊戯をして男子をして其の妙技を三嘆せしめる。此頃の娘は親父や先生の知らない留守に却々味のことを覺える、西山に春く陽を名残りに行列を造つて引き上げる。

十月七日 桐生高等工業學校と對校試合

本年度新學期匆々から對照の的である。桐生高工の對校試合の日來る各部敵を呑むの概を示し意氣天を衝く、上田停車場の構内に數十流の旌旗をなびかせつゝ、万歳聲裏に出發、淺間にもゆる胸の思ひを托し、毅然として雲表より群馬の平野を睥睨する威容に背かりつゝ、桐生着、此所に一泊して明くれば之はしたり朝來の雨！万事休矣！である。如何に切齒扼腕しても之ばかりは仕方が無い、戸外の競技を全部フイにして柔劍道と卓球だけを競技する。

卓球は非常な好成績で壓倒的に敵を襪服せしめたが柔劍道は何れも破られる。

雨のため許りでもなく情景甚だ濕つばい。長棍、ラケット、竹刀等、車中、棚の上に雑居して、一は長い欠仲をかみしめ往復共に手持無沙汰であるのに一は往々に比べて歸りの苦しさ悄然として沈みがちなるも亦已むを得なき次第である。

同日 養蠶部員一同遠足

養蠶部員總勢十七名別所温泉へ遠足、今日は朝から一日中、沛然如流車軸、午前と午後雨の雨の神さんが二人とも同伴

十月二十一日二十二日 記念運動會

十月の第三日曜日、に相當する二十一日は雨、切角準備したグラウンドは減茶苦茶である、天を眺めて一日を送れば明け、二十二日は快晴、金風颯爽と亘り、絶好の運動日和である。

本年は對科競技が全部廢されたから本校名物の應援ダンスも見られなくなつた、其の代りに各科盛り澤山の餘興が出た。

ちつとは弊害があつても對科競技のキビ／＼した所が見たい、感激の涙が若き双頬を流れて、ふけども拭ひども抑へきれぬ其の喜び―或は其の悲しみなげき―其所に青春の純情が現はれて頼母しいではないか―餘興等は畢竟小さき技巧の遊戲である、地を眺めて歩けば安全第一である、限り無き蒼空を仰いで歩けば足えは危險に相違ない。然し星眸の美しさよ、危險何するものぞ！

非常なる盛會裏に終了、校長先生の御訓辭のある頃は、たそがれ時で明かならぬ夕暮となつて將に平和の夜の暮はきつて下ろされた。

十月二十四日 學生軍事演習

二十四日から向ふ四日間全校學生は高崎十五聯隊へ軍事演習のため出發、將校の王子も四日間は自由をそがれた窺窟の箱詰である。

然し喇叭の音に明けて喇叭の音に暮るゝ規則正しい此生活も又珍らしく楽しいものである。一同元氣で歸校。

十一月四日 紡績部一同遠足

天氣も麗らかに晴れわたつた珍らしい秋日向であつた。紡績部職員業手一同の懇親を兼ね神科村の砥石城趾へピクニックに出かける。期待した山海の珍味もいさゝかあてがはづれて生ま煮の里芋を突つついて、この古城趾の昔を偲ぶといふ詩的な情景になつて了つた。廢墟に古りし英雄の俤を想ひ詩藝を充たしつゝ夕陽を浴びて環へる。

母校先生の移動其他

和田仙太郎先生

五月六日歐洲遊學の途に就かる。

高橋清七先生

今春本校を退職せられたが更に五月一日から囑託教師として、蠶種學實驗の一部を擔當せらるゝことになつた。

伊藤忠雄先生

五月二十日附講師として來任せらる。

先生は母校の隣地神科村の御出身、上田中學、松本高等學校と云ふ何れも本校にゆかり深い土地の學舎を出られ大正十四年東京帝國大學文學部英文學科卒業、直に任東京府立第三中學校教諭。而して今日に及んだものであるが本校の請囑に依り來任せらるゝことになつたのである。擔當課目は勿論英語、和田教授海外留學中の期間である。教科書は鳥渡毛色の變つた、interesting のもので第一學年は Howthone の A Wonder Book、二年には Robert Striven son の探偵物で發音の流暢、解釋の適切平易なる所に新味津々たるよし。

丸山胤炳先生

原田教授留學中、上田中學校教諭の同氏が本校講師として養蠶科の數學を擔當して居られたが、今回六月三十日限り御退職なされ、其後任を同窓廣瀬廣氏が襲ふことになつた。

校内課長の交迭

今回圖書課長和田教授が海外へ留學せられたので左の如き交迭が行はれた。

圖書課長

阿形教授

教務課長

早川教授

阿形輝司先生

六月三十日附を以て高等官二等に陞叙せらる。

佐藤利一先生

長らく滯歐中の所去る七月十日歸校さる。先生が上田の地を踏まるゝにあつて特に思ひ出深いことは滯外中に於て最愛のいとし子を失はれたことであつた、吾等は實に惻愴の情に堪えないのである、そのせいでも

あらうか髪髻に白いものが目立つて殖えた様に見えた、二學期から微生物學、蠶病學が先生の手によつて開講されることになつた。

園田勇先生

商學士石井爽講師が家事都合上八月末日退職されたので、其後任講師に囑託せらる、講師は目下丸子農商學校の教職に在つて、本校に於ては商業通論を擔當せらる。

古谷榮藏先生

從來生徒監として學生の總取締をして居られたが今回、官制の改正によつて學生主事と云ふ名稱に變更せられた。生徒監等と云ふいかめしい名前より幾分濫かい感じのする名稱である。

岡徳治郎、佐藤春太郎兩先生

九月一日附を以て高等官三等に陞叙せらる。

岩崎喜三郎先生

十月十日附を以て助教授に任ぜらる。

學生だより

近 時 邊 々

糸 三 正 木 生

黄色に輝いた校庭のポプラが、遠い烏帽子の紅葉の山を背景にすつきりと青い空にのびてゐたのも此の頃のことだと思つてゐたのに、もうカサリコソリと散り初めて修巳寮の窓下を一面に敷きつめてゐる。

運動會、發火演習、東京横濱視察旅行、御大典と矢つぎ早やにつゞいた私達の行事の爲め、新教務課長の早川先生から——庭のポプラも散り初めたから君達もそろ／＼勉強を初めて居るだらうね——と柔らかな皮肉を受ける迄は、皆